

平成26年度 海外臨床薬学研修報告書

「USC海外研修を終えて」

研修期間：平成26年7月26日～8月10日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5年

100973128

小林 礼奈

USC 海外研修を通してアメリカの臨床現場を見学させて頂き、多くの学生と交流することができた。臨床現場を見学し、日本とは異なる制度の特徴であるテクニシャンが働いている様子や薬剤師が日本よりも積極的に医療に関わっている様子を見学することができた。USC の関連施設である薬局 Plaza Pharmacy、大学病院 Keck Medical Center、がん専門病院 Norris Cancer Center を見学させて頂いた。Norris Cancer Center では安全キャビネットではテクニシャンが調製している様子や患者さんが化学療法を受けている様子を見学させて頂いた。薬剤師が当然のように常駐し、患者さんの状態を確認していると感じた。また、アメリカにチェーン展開しているドラッグストアの CVS pharmacy も見学させて頂いた。USC のあるカリフォルニア州は薬剤師がワクチン接種を行う事ができる。薬局には診察室が設けられていて患者のデータを確認して、処置を行えるようになっていた。見学させて頂いた CVS pharmacy は薬剤師 1 人のみが常駐している小さな薬局であったが、診察室が設けてあった。また大学病院でも薬剤師が薬剤としてワクチンの追加処方が可能であると話を聞き、ワクチン接種が薬剤師の役割として広く浸透していると感じた。他にも血圧測定や糖尿病の合併症評価を薬剤師が積極的に行っていると感じた。ハーブを中心に扱っている Santa Monica Homeopathic Pharmacy ではアメリカではハーブよりも鍼灸がよく用いられることや文化によって摂取すべきサプリメントは異なるといった話を聞くことができた。アメリカは予防医療に積極的であると聞いたことがあったが、それを実際に体験することができた。薬局で患者さんがサプリメントの成分を自分で確認していた。サプリメントには 1 つの成分のみが入ったものから、ビタミンやミネラルが配合されたもの等同じ成分でも数種類のものであった。薬剤師は患者さんに声をかけアドバイスをし、患者さん自身がどのサプリメントを購入するか選択していた。これは一般の人が予防医療に対する基礎的な知識があることを示している、薬剤師は専門的な知識を説明する仕事を行っているのではないかと思った。今までに学習したような生化学の知識を用いることでサプリメントの選択の際にアドバイスを行えるのだとわかった。また薬は副作用があることや肝機能・腎機能を悪化させること、コストがかかることも患者さんは理解していないこともあるため情報提供していくべきことであると感じた。将来疾患にかかって高額な医療費を払うよりはサプリメントをとって健康を維持するのが良いという考えが根付いているのだと感じた。アメリカは OTC 医薬品も日本より多くみられた。例えばオメプラゾールは相互作用が多く日本では一般用医薬品として販売されていない。しかし私が見学した薬局ではオメプラゾールが複数の会社から販売されていた。また日本ではラニチジンの OTC 医薬品は最大 24 錠であるがアメリカでは 80 錠のものが販売されていて、1 包装で数量が多いものがあると感じた。また薬剤師ではない薬局の店員も OTC についての知識が豊富であると感じた。これらからも一般の人でも薬に関して基礎的な知識があり、セルフメディケーションの意識が高いのではないかと思った。予防医療やセルフメディケーションは健康のためにも医療費を抑えるためにも日本でもっと進めていくべきことであると感じた。そのためには日本人でも効果があることを示すエビデンスが必要であると思った。ラウンド

の際、医師にとって薬剤師は必要不可欠であるため、電話がかかってくることがあると臨床現場で働いている薬剤師の方から話があった。病院では主な業務として医師からの質問に答えることが多いといった話もあった。また今回見学することはできなかったが、クリニックと呼ばれる薬剤師が独立して指導やカウンセリングを行う施設もアメリカには多くある。これは他の医療従事者が薬剤師を信頼している証であり、あまり日本では見られないようなことではないかと感じた。医療の現場を見学して患者さんや他の医療従事者からも薬剤師の役割が認識され、必要とされていると感じた。また薬剤師自身もその責任の重さと役割を十分に認識していると感じた。

アメリカの学生と交流して感じたことは将来、薬剤師として働くというモチベーションが高いことであった。ほとんどの学生が薬学のサークルに所属し、地域のイベントに参加しているという話があった。また病院や薬局でのアルバイトで学生のうちから医療の現場に携わっていると感じた。私自身実務実習を経験して現場では大学で学ぶことはできない多くのことを学ぶことができると身をもって感じ、アメリカの学生は早いうちから多くのことを勉強していると思った。カリキュラムも日本より臨床現場で学ぶ時間が多くアメリカの学生は非常に多くの時間を現場での経験に費やしていると感じた。最終学年での実習は急性期・救急医療、外来、地域薬局で行うため、疾患により異なる薬剤師の役割を学ぶことができるカリキュラムであると感じた。薬剤師の役割の違いを学ぶことができ、薬剤師の仕事についてより理解ができるものであると思った。薬局で学生が積極的に患者さんに質問はないかと声をかけている様子も印象的であった。

今回の研修では一部であるが薬剤師の職域が広いアメリカの医療現場を見学することができ、日本の薬剤師もこれからもっと役割を増やしていくことができると感じた。多くの刺激を受けた海外研修の経験を生かして、今後の薬局実習や学生生活を有意義なものにしていきたいと思う。